

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 79

2018年11月

Special to the Newsletter

スペインとアメリカの間

林 美智代

「新大陸」征服者の地

今年、休暇を利用して、スペインへ旅した。征服者エルナン・コルテスやフランシスコ・ピサロを輩出したエストレマドゥーラへ、かねてから行ってみたいと思っていたからである。植民地史の授業で、当時のエストレマドゥーラの状況、コルテスとピサロの経歴やそれぞれのアステカとインカの征服戦略を話しているというのに、彼の地に行ったことがなかった。まるで「新大陸」に足を踏み入れずに、記録を書き残したクロニスタと変わりなかったのである。

セビリアを起点に南からエストレマドゥーラを北上し、最後はマドリードへ向かう計画を立てた。セビリアではインディアス古文書館やセビリア大聖堂を訪れ、レオン・カスティリャ王国の4人の王に担がれたコロンブスの棺や大聖堂内の見どころを見学した。セビリア大聖堂は、その規模において世界三大大聖堂のひとつに挙げられる。カトリックの総本山サン・ピエトロ大聖堂を訪れた時にも、その規模と所蔵美術品の質量に圧倒された記憶が蘇った。セビリア大聖堂では、啞然とするほどの大量の銀で制作された数々の聖具が陳列されていた。ボリビアのポトシ、メキシコのサカテカスやグアナファトの鉱山で、強制労働させられた先住民が採掘した銀でできていると思うと、これほどだったのかと息を呑んだ。栄光の「光と影」とはよく言ったものである。

勝者は過去を強化する

フランシスコ・ピサロの故郷トルヒーリョの町の大広場のほぼ中央に、遙か彼方に視線を定めた雄姿ピサロの騎馬像が置かれ、その台座には「ペルー征服者」という銘板がはめ込まれている。ペルーは新大陸であり、同国の礎を築いたという意識にほかならない。この騎馬像は、アメリカ人彫刻家チャールズ・キャリー・ラムセイが1927年にパリのグラン・パレに展示後、29年6月2日にトルヒーリョに寄贈したものである。その除幕式にはスペイン首相ミゲル・プリモ・デ・リベラやアルフォンソ・デ・オルレアン、在スペイン米国大使、及び、ペルー全権大使ドン・エドアルド・S. レギアが参列した。レギア全権大使が参列していることから、ペルー

政府はスペインの征服史観を拒否するには至っていなかったことを証明している。ラムセイは、スペインの要請を受けて、リマ市建都 400 周年を記念するピサロの騎馬像を制作した。それは、1935 年 1 月 18 日、アルマス広場に設置された。当時のリマ市長は、その除幕式でピサロの騎馬像を「文明をもたらした英雄の勇姿」(la figura preclara del héroe del civilizador) と称えた。しかし、リマ市民には受け入れがたく、52 年にはアルマス広場から撤去された。2005 年、その移設先からも移され、現在は城壁公園にあるという。

ラテンアメリカの基礎知識を教えた学生の中にスペイン人学生がいて、彼女はすでに母国で大学 1 年生を済ませて来日した。授業では、日本で出版されているラテンアメリカ史の書籍なら、どれにでも書かれている先住民の強制労働や人口減少などの基本事項を説明しただけなのに、そういう考え方もあるのかと思ったと言っていた。スペインでは、毎年 10 月 12 日は Día de la Hispanidad (「イスパニア・デー」) として、コロンブスによるアメリカ大陸到達を祝うのだから、彼女は普通のスペイン人である。勝者の定着した歴史意識は若い世代に伝えられ、部分的に修正されることはあっても、根底から覆ることはないだろう。

高貴な血と富は物語ヒストリーを創作する

トルヒーリョの大広場の一角をコンキスタ侯爵の館が占めている。フランシスコとアタワルパの異母兄妹キスペ・シサとの間に生まれたフランシスカ・ピサロ・ユパンキが、夫となった叔父エルナンド・ピサロと暮らした場所である。館の外壁面の一角には、カルロス 5 世とピサロ家の紋章、ピサロ一行の船、アタワルパ、クスコの城塞というペルー征服を物語る表象や侯爵家の主要人物フランシスコとキスペ・シサ、エルナンドとフランシスカの 2 組の夫婦の頭部のレリーフが彫られている。この彫物が、ピサロ一族によるインカ「征服」と 2 組の男女の「結婚」によって巨万の富を獲得した典型的インディアノであるピサロ一族の栄光の物語を、大広場を行き交う人々に誇示していたことは容易に想像できる。しかし、侯爵家の継承者フランシスカはどう見られ、彼女のアイデンティティはどんなものだったのか。

彼女が 11 代インカ皇帝ワイナ・カパックを祖父にもつとはいえ、財力がなければ、スペイン貴族にはただの混血の小娘として歯牙にもかけられなかつただろう。彼女は幼くして母と引き離され、7 歳で父フランシスコと死別。父方の叔母に引き取られたが、やがてカルロス 5 世からスペイン召還の命が下り、17 歳でペルーを後にした。その年齢なら、生まれ故郷のことを十分記憶していたに違いない。その後、アルマグロ暗殺の咎でモタ城に幽閉されていた年の離れた叔父エルナンドと 18 歳で結婚し、5 人の子供を産んだ。当時、スペインで最も裕福な貴族だったフランシスカは西洋女性としての教養を授けられ、白人の女奴隷と先住民の召使いに傳かれていたという。夫の死後、再婚を禁じたエルナンドの遺言に背いて、若い貴族と結婚。マドリードで暮らし、年下の夫のために財産を蕩尽した。普通なら深い孤独を味わい、自暴自棄になってもおかしくはない境遇である。彼女の「心の闇」は、彼女しか語ることができない。しかし、この館のレリーフは「征服 = 血と富の結合 = 文明化」を含意する。400 年後、ピサロの騎馬像が加えられ、この含意は強化された。

カセレスにあるトレド・モクテスマ家は、その含意をより洗練させたかたちで留めている。この名家は、モクテスマ2世の王女 Ichcaxóchitl Tecuichpo（「綿の花の王女」の意）、洗礼名イサベル・デ・モクテスマが5人目の再婚相手、カセレス出身のファン・カノ・デ・サアベドラとの間にもうけた5人の子供のうち、末のファン・デ・モクテスマがこの地の名門エルビラ・デ・トレドと結婚したことに遡る。15世紀に建造されたこの館は、16世紀末から17世紀初頭にかけて、イサベルの孫によって建物上部が改築された。館の外壁にはこの一族に関わる紋章が彫られている。内部の2室の壁面には、ローマ皇帝の肖像とメキシコ各地の13人の王がそれぞれ描かれている。私がこの館を訪れた時、フレスコ画の一部は剥落しており、見て取れたのはテノチティラン、テスココ、ミステカ、トトラパ、チャルコ、オトゥンバの諸王の肖像と中世の城の風景らしきものだけだった。

ファン・カノは妻イサベルがメキシコで亡くなると、修道院に入った2人の娘をメキシコに残し、男子だけを連れてカセレスに帰還したというから、イサベルはこの館のフレスコ画を知らずに死んだことになる。カノ・モクテスマ一族にとって妻・母・祖母であるイサベルを偲ぶだけならアステカ王だけで十分である。2室のフレスコ画は、この一族がメキシコの頂点に君臨していたモクテスマ2世の直系であることに加えて、アメリカ文明とヨーロッパ文明の融合であるという物語を表している。スペインでは、先住民の「理性」をめぐる論争が行われた。モクテスマの後裔とはいえ、先住民の血を受け継いでいることを当時のスペインで誇示^{ヒストリー}しても、問題はなかったのだろうか。時代の転換期には、人種を問わず、貴族の血と富を継承し、物語を創作して次世代に伝えていくことが重要だったのだろうか。

イサベルが最後の2度の再婚で遺した後裔は、スペインの多くの貴族と縁組を結び、500年間で約2,000人にのぼるといふ〔Proceso: 2010〕。13代ミラバジェ伯爵夫人によれば、コルテスがモクテスマに対し彼の子孫に対する配慮を約束したために、それ以後1934年まで、約400年間、伯爵家に保障年金が支払われていたというから、驚きである。

先住民貴族を受容し、スペイン貴族との縁組が繰り返されることで、一族の社会的・経済的地位が不動になる。先住民が血涙を絞って、フランシスカやイサベルの後裔の生活を築いたことは否定できない。しかし、勝者も敗者も両者を結んだ者も、500年間、命を紡いできたことは、それぞれにとって真実である。考えてみれば、歴史とは、「語られること」の集積であるとともに、「語られないこと」の集積でもあることを、改めて痛感した休暇だった。

（関西外国語大学教授・イベロアメリカ研究センター長）

[引用・参考文献]

- Proceso 2182, “El linaje de Moctezuma vive... en España”, 16, sep. 2010, <https://www.Proceso.com.mx/104091/el-linaje-de-Moctezuma>, アクセス日:2018/08/26.
- El Mundo, “México tiene nueva emperatriz”, 2, abril, 2016, <http://www.El-mundo.es/oc/2016/04/02>, アクセス日:2018/08/26.

Scenery

文学の中のアメリカ生活誌 (70)

新井 正一郎

The Civil War and Lincoln (南北戦争とリンカン) 北部自由州と南部奴隷州間には関税、銀行、国内交通開発などの争点があったが、両者間の決定的な分裂のもととなったのは Republican 「共和党员」とリンカンであった。新領土に奴隷制を拡大し、連邦議会における自分たちの権力を守ろうとする南部とこれを認めない北部は真っ向から対立し合っていたのである。1860年の大統領選挙でリンカンが勝利すると、南部人は南部の輝く諸制度や文化が、奴隷制廃止論にとらわれた共和党政府によって、無残にも葬られるのではないかと恐れた。彼らは誇る社会システム、プランテーション経済、生活様式を守る残された唯一の道は連邦から離脱し、新しい国家をつくることだと考えた。先ず南部諸州が、サウスカロライナ州を先頭に連邦を脱退した。その1ヶ月後ミシシッピー州、フロリダ州、アラバマ州など6州が相次いで離脱した。これら7州の代表はアラバマ州モントゴメリーに会し、ジェファソン・デイビスを大統領に任命した。サウスカロライナ州は先駆的行動をとるにあたり、北部は奴隷制を敵視する人物を大統領に選んだと力説した。だがこの非難は正しくない。リンカン大統領が明確に反対しているのは、南部諸州の奴隷制ではなく、北部や西部の新領土における奴隷制であったからだ。彼は3月4日の大統領就任演説で、連邦からの分離は連邦への反乱であり、和解を強く唱えた。大統領就任の翌日、彼はサウスカロライナ州チャールストン湾内の連邦に残された海軍基地サムター要塞を守っていた司令官アンダーソン少佐からの手紙で、100名ほどの守備隊が食料不足に陥っていることを知る。武力衝突を恐れた閣僚は反対したが、リンカンは食料補給部隊を派遣し、就任演説で述べた国家の統一を堅持する姿勢を明示した。が、この部隊が到着する前に南部将校たちは砲撃を命じ、2日後の4月14日、要塞は陥落した。

リンカン大統領は直ちに7万5,000人の志願兵を募集した。他方、これを機にアーカンソー州、テネシー州など4州が連邦から離脱した。従って南部連合は11州、連邦に留まったのは23州であった。特筆すべきは、連邦政府による最初の徴兵選抜がいくつかの都市で暴動を招いたことだ。何故かという、この徴兵制度が公平でなかったからである。裕福な者は300ドル（当時の男性の年収の3分の2）を払うか、代わりの者を出せば兵役を免れることができた。特にひどかったのは、1863年7月にニューヨークで起こった貧しいアイルランド系労働者を中心とした暴動だ。資本家か黒人市民か、いずれにせよ自分たち以外の者のための戦争と考えていたので、暴徒たちは最初徴兵事務所の徴兵に当たった役人を襲い、次いで金持ちの家、商店、倉庫を略奪し、さらに黒人を殺害した。暴動の勃発から4日後、警官とゲティスバーグからの援軍によって、騒動はやっとおさまったが、死者は数千人に及んだ。当時ワシントンで負傷兵の看護を手伝っていた詩人ウォルト・ホイットマンは、母への手紙のなかで、耳にした暴動と徴兵についての考えをこう記している。「ニューヨークでついに暴動が起きたようです。(略) 私が各方面で耳にするのは、小型砲艦出動とか、市街砲撃とか、暴徒射殺とか、集団処刑などといった脅威だけです。(略) 今朝のニューヨークからの情報では、政府は徴兵制の中止を命じたとのことです。私はそれが本当であることを望みます。というのは、政府が徴兵に手を貸せば貸すほど、面倒が大きくなるからです」。「アメリカン・ネッサンス」

と呼ばれたこの時代の作家たちの間で、人食い人種（タイピー）と暮らした人と知られていたハーマン・メルビルも、「屋上」という詩のなかで、その情景をこんな風書いている。「無神論者たちの暴動の叫び声（略）／街はネズミたちに占領された」。

多くの人びとが、リンカンの印象をしるしている。しかし作家ではホイットマンによって書かれたものが最初である。彼によると、初めてリンカンを見たのは、1861年2月18日か19日とのこと。大統領就任演説のため、リンカンがワシントンへ向かう途中、ニューヨークに立ち寄ることを聞いたので、彼は宿舎アスターハウスの玄関前に置いた乗合馬車の屋根にのぼり、待っていた。その時のリンカンの姿をこう書いている。「私はその光景を、特にリンカンをはっきり見た。その顔つき、身振り、まったく落ち着いた姿、冷静さを、並外れて高い身長、真っ黒な服、あみだにかぶったシルクハット、褐色の顔色、皺だらけだが、物静かな顔、黒い髪、彼は群衆を見回す時、腕を後ろで組んでいた」。次に彼がリンカンを見たのは1863年、場所は首都ワシントンである。当初、彼はボストン時代の友人の家に寄寓していたが、その後下宿屋に移り、そこから前記病院に通っていた。偶々そこはリンカンが郊外の宿舎からホワイトハウスへの行き来に通うところだったので、この期の彼は頻繁に大統領を見かけている。その回数は2、30回におよんでいる。もっともリンカンと話し合った証しはない。母宛ての手紙には、出会ったある日のリンカンの姿がこうある。「生と死の要求で、彼の褐色の顔にこれまで以上に深い皺がありました。私は彼を見るたびに個人的に愛着の抱ける人だと思えます。純粋な心からの優しさで西部特有の男らしい姿が一体となっているためです。深い皺と a deep latent sadness 「深く潜んだ、悲しみ」をたたえた目、深い皺の下にある優しさで男らしさという不可解な風貌を持つリンカンは、やがてホイットマンに不屈な精神を持つミケランジェロを思わせるのだ。別の母への手紙にこうある。「彼はミケランジェロの顔をしています。（略）彼は堂々とした不屈な精神で、国旗を世界の前に威嚇するように高くかかげることに信じられないほどの手腕を示したのです」。今や彼は連邦の象徴をリンカンに見ているのだ。彼はリンカンを自分が詩で表現しつつあることを、公の世界で実現した民主主義の権化、人類愛の壮大な手本と信じるようになっていた。そのことを比較的によく表しているのが、敬愛する亡き大統領を偲ぶ詩のひとつ「おお船長！わが船長よ！」と題する詩である。最初これは1865年11月4日付『サタデイ・プレス』に現れた。その後詩集『軍鼓の響き』第2版の付録に収められた。これが加筆修正された後、1870年に刊行された小冊子『インドへの航路』においては詩群（リンカン大統領埋葬歌）に入れられ、さらにその詩群のタイトルは『草の葉』1881年版で現在のように改められた。

ここに描かれているのは、南北戦争という危険な嵐に遭遇し、船長の死に会いながらも、というより船長の死が大きな機となり、船（アメリカ合衆国）は「苦難をのり切り」寄港したばかりか、「念願の宝」つまり連邦の統一を「手中にできた」という詩人の確信だ。以下は詩の前半の一部。「おお船長よ、私の船長よ、われらが恐ろしき旅はすでに終わりを告げ、／船も今はなべての苦難を越え、念願の宝も手中にあり／港は近く、鐘の音は鳴りひびき、人びとはこぞって歓喜に酔いつつ、／（略）されどおお、心よ、心よ、心よ、／おお、したたり落ちる赤い雫よ、／甲板の上にわたしの船長が、／すでに息絶えて冷たく」。（酒本雅之他訳）

（天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長）

【アメリカス学会夏期研究発表会・発表要旨】

カナダ BC 州の日系カナダ人と日系新宗教 —戦前の天理教の活動を事例として—

尾上 貴行

日本人のカナダへの渡航は 1877 年が嚆矢とされ、19 世紀末までにはバンクーバーやスティーブストンなどで日系人コミュニティが形成されている。そのコミュニティの宗教界では日系キリスト教と仏教が勢力を二分し、宗教的な活動だけでなく政治、経済、社会そして文化の面でも大きな役割を果たした。一方、20 世紀に入ると日系新宗教系の金光教や天理教も布教活動を開始したが、これらの教団についてはこれまであまり論じられていない。そこで本発表では、カナダのブリティッシュコロンビア州（以下 BC 州）で戦前に形成された日系人コミュニティにおける日系新宗教について考察することを目的として、その一つである天理教を事例として取り上げ、その活動の歴史と特徴を明らかにした上で、天理教の諸活動が日系人コミュニティや在住する日系人たちの生活の上に果たした役割について考察することを試みた。

発表ではまず BC 州への日本人渡航と日系人コミュニティ形成について概観した。その特徴の一つとして特に初期移住者の出身地とカナダで就労した職種には関連があり、例えば和歌山県出身者は漁業、滋賀県出身者は伐採・製材業に従事する者が多かったことを述べた。また 1930 年代には、政治的社交団体、経済的団体、教育団体、宗教団体など多様な団体組織が形成され、日系人は通常いくつかの団体に同時に所属していたこと、彼らは団体ごとで結束するとともに様々な規制をうけたため日系人コミュニティは全体として強い統制力をもったことなどを指摘した。次に、二大勢力であった日系キリスト教と仏教の伝道略史と特徴について述べた。前者が日系人コミュニティで果たした役割としては矯風・啓蒙・同化、医療活動、英語教育・

宗教教育などがあり、また日系キリスト教は現地社会で生き抜くために様々な側面で日系人をサポートし、最終的に現地の言葉、風俗、習慣を学び、白人社会に「同化」していく方向を志向していた。一方後者の主要な役割としては葬儀などの儀式に加えて日本語教育、日本的道德の普及であり、また当初キリスト教会のサポートによって形成された日系人コミュニティでの生活において日本的側面を提供することが大きな役目となった。そして両教団とも青年会や婦人会などを組織して、様々な活動を通じて日系人コミュニティにおいて社会的・経済的役割も果たしたことを述べた。

次に天理教の伝道開始と活動の展開について述べた。天理教のカナダ伝道は 1910 年代に布教目的で渡った教師やカナダで入信し日本に一時帰国した後に教師として再渡航したものなどによって開始され、1930 年代に教団の代表である 2 代真柱中山正善の巡教や教団本部直轄の教会設立などを通じて活動が活発化した。BC 州の各地で天理教の講演会が開催されるようになり、本部から派遣された教師たちは日系人コミュニティにおける指導者たちとの関係を築いていった。その伸展の様子は 1930 年代にカナダ人研究者によって行われた BC 州の日系カナダ人に関する現地調査の報告に宗教団体の 1 つとして天理教の名前が挙げられていることにもうかがえると指摘した。その上で天理教伝道の特徴として、布教師たちが日本と同様に戸別訪問という布教方法によって、特に病气たすけを通して、天理教の説く「人たすけ」を目指したこと、主だった教師と信者が設立した慈善団体としての「加奈陀天理教会」が BC 州に散在する信者たちが集まる機会を生んだこと、さらにそこから発展的に設立された「天理教加奈陀教会」が布教活動を組織的に推進したことなどを明らかにした。また 1920 年代以降日系人コミュニティにおいて大きな課題であった子弟

教育に関しては、サタデースクールを開くなどして日本語と日本文化教育を推進したことを指摘した。

最後にまとめとして、天理教のBC州における布教活動は厳しい社会状況で生活する日系人たちへ身体的・精神的救済をもたらそうとするものであったこと、そして教会形成による組織的な動きは天理教として一つの宗教コミュニティを形成する試みであったと述べ、しかし日系人コミュニティでの政治的・経済的・社会的・文化的貢献という点で、宗教団体としての規模の面でも活動の種類や内容においても、日系キリスト教会や仏教会ほどの役割を果たすには至らなかったことから、戦前のBC州における日系人コミュニティの宗教団体として天理教はごく少数派であったとの発表者の考えを示した。その上で、カナダでの英語文献調査や他の日系宗教との比較などを今後の課題として、新宗教研究を通じて日系カナダ人の宗教文化の理解をさらに深めたいと述べて発表を締めくくった。

(天理大学おやさと研究所研究員)

世界を蝕む縁故資本主義 (Crony Capitalism)

福山 孝

2017年12月2日発行の「アメリカス研究」22号に私の論文「民主主義の危機—米国医療保険制度改革の齟齬」(The Crisis of Democracy: Discord over the Reform of the Medical Insurance System in the United States of America)の掲載を許可いただきましたが、現在台湾の淡江大学大学院博士課程に留学中のため、アメリカス学会夏期研究発表会(2018/7/14)まで発表させていただく機会がありませんでした。

私の論文は、日本や台湾と同様に全米各州の全ての市民が同じ条件で加入可能で連邦政府が一元的に管理する連邦医療制度(National Health Insurance)の創設を目指すオバマ大統領の努力

に対して立ちはだかった数多くの障害や反対勢力の抵抗がいかに医療保険制度改革を阻み、その最終案に如何なる影響を与えたかについて考察いたしました。その中で私が最も注目したのは、アメリカ全土のあらゆる分野に蔓延している縁故資本主義(Crony Capitalism)でした。

米国の縁故資本主義の悪例

1. 米国のロビー活動と政治献金：日本の「幹旋利得」に最も近い欧米の概念は「ロビー活動用政治献金」です。ロビー活動とは個人、団体が影響を及ぼすために行う私的政治活動で、欧米では禁止されていません。ロビー活動用資金が全て違法なら米国に政治家はいなくなると言われています。これに対して日本では正当な政治活動献金は認められる一方、不当な口利きのための現金支払いは違法となります。

2. カネと政治と経済成長：1970年代後半から、アメリカの主要産業はアメリカという国のシステムの決定的な弱点に気づいて、それを利用するようになりました。それを利用すれば、競争原理を免れることができ、それが無理な場合でも少なくとも和らげることができるのです。ズバリ言うとカネで人を動かすほうが、きちんと仕事をするよりはるかに楽だということに気づいたわけです。

3. 縁故資本主義がアメリカにもたらした憂うべき現象：米国においては年々貧富の格差が拡大していますが、本当に驚くべきことに、2007年には上位1%のうちの1%、すなわち25,000足らずの家計が、国民総所得の66%以上—1兆ドル弱—を稼ぎ出すようになっていることです。

4. 米国医薬業界の商業化(Commercialization)：米国で開発された多くの医薬品には特許権が設定されていて、開発途上国をはじめ、自国の患者が使用しようとしても、独占価格が高価なため、本来助かる命も落としてしまうことが大きな問題になっているように、米国では技術開発への動

機は利潤追求が主要な目的になっています。

5. 米国の医療費高騰をまねている具体例：日本では国が指導して、検査（CTや血液検査など）や医療行為（手術や点滴など）の価格は細かく決められています。そのためこれらの価格は何処の医療施設で受けても一定です。日本でも、薬剤の価格は各製薬会社が決定しますが、この際も国の指導により、似たような価格になるよう強力で指導されます。米国では国による医療や薬剤の価格への介入がないため、価格がまちまちであるうえ、とんでもない価格をつける悪質な例があつとを絶ちません。

おわりに

実際、政府の介入を嫌うアメリカ医師会や民間保険会社等の圧力団体の反対によって、オバマ大統領の目指した「連邦政府が一元的に管理」する公的医療保険制度（シングル・ペイヤー方式）の導入が不可能になってしまいました。これは、利益団体 (interest group)、つまり圧力団体 (pressure group) が米国のあらゆる分野、領域および地域に深くはびこって利権を貪っているからです。この様な米国の悪習と発想法を根底から改革し、これらの利益団体の強力で巧妙な利権獲得の手口を排除することができないかぎり、医療保険制度改革だけでなく如何なる改革も不可能であります。まさに、縁故資本主義のせいで、現在アメリカは最大の民主主義の危機に瀕しているのです。

(淡江大学大学院博士課程)

アメリカの医薬品における音象徴

山本 晃司

スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュールは *Course in General Linguistics* (1959) の中で音と意味の関係を恣意的としている。『「あ」は「い」より大きい!?!』の著者である川原繁人 (2017) が指摘するように、意味するものと意味されるものが恣意的な関係ではないと

すれば、同じ指示対象物に対して同じ名称がつくことになる。しかしながら、「犬」は日本語で /inu/、英語で /da:ɡ/ という音の並びになっていることからその恣意性が認められる。その恣意性についてより平易に説明している *Linguistics* の著者 Jean Aitchison (1999) も同様の見解を示しているが、オノマトペ (“boom, crack, pop, splash” など) は例外であるとしている。拙稿ではこのオノマトペを取り扱っていないが、オノマトペ以外にも音と意味の間に何らかの関連性があることをうかがわせる例がある。

David Crystal (1995) は、その著書 *The Cambridge Encyclopedia of the English Language* においてその例をいくつか紹介している。子音と子音から成る子音群、例えば、語頭が /gl-/ で始まる語 (“glamour, glare, glass, glaze, gleam, glimmer” など) には “brightness and light” という意味が含まれているという。この意味合いを持たない語 (“gland, gloom, glove, glue, glum, glutton” など) もあるが、音が何らかの意味を持つ例は他にも存在する。

Simon Horobin (2013: 9) による著書 *Does Spelling Matter?* に “The letter <g> has the hard /g/ sound in *goat*, but a soft sound in *gentle*” とある。この一文には「硬い」そして「柔らかい」という表現を用いた音の説明がなされている。人によって音に対する印象・感覚（共感覚、synaesthesia）も異なるため、絶対的とは言えないが、/g/ という音に対して「硬い」と描写する学者は他にもいる。特に詩の世界では、作品中で使用される音が醸し出すその意味と効果についての研究がよくされており、/g/ は硬質的な音の部類に入ると言われている (Leech, 1969; Roberts, 1986)。

音と意味の関連性を研究する分野は音象徴 (sound symbolism)、または音表徴 (sound suggestiveness) として知られている。拙稿ではアメリカで取り扱われている医薬品名の音

韻的特徴を取りあげ、英語において音韻的に美しいとされる語との間にいくつかの共通点があることを指摘している。その医薬品名は2018年2月19日～3月10日までアメリカ滞在中にテレビCMやお店で見聞きした58品名である。商品名の発音についてはCMまたはYouTube上で確認し、発音表記は米国標準発音 (General American) に準拠している。分析対象としての個別音は合計417 (子音: 253、母音: 164) である。医薬品名の音韻的特徴を見ていくと、その品名は複音節が多く、外来語を連想させるような長さとなっている。実際、音節構造としては3音節が多く (38品名)、次いで2音節となっている (15品名)。しかしながら、その強勢の位置に関しては外来語の強勢規則ではなく、本来語の特徴がおおいに反映された結果となっている。医薬品名で使用率の高い子音は、その頻出度の高い音から並べていくと、/n/ (34), /r/ (33), /t/ (29), /s/ (28), /k/ (26), /l/ (23), /v/ (13), /z/ (12), /m/ (11), /d/ (10), /p/ (8), /b-/f/ (8) となっている。この173個のうち、有声子音は90個ある (52%)。その使用率がわずかに高いのは、有声子音がよりリラックスした音と言われていることも1つの要因として考えられる (Fry, 1979; Leech, 1969; O'Connor 1967, 1980)。次に注目したい点は頻出度の高い子音の上位を占める /n/ と /r/ の音である。主観的すぎるという批判もあるが、これらの音は快音調 (euphony) の一種であり、耳に響きの良い音とされている。ここで挙げた医薬品名における音韻的特徴 (音節構造、強勢位置、頻出度の高い子音) は音として美しいとされる語にも見られ、音と意味の間の関連性が垣間見える結果となっている。

(天理大学国際学部講師)

ブラジルにおける日本語教育 —移民制限法と日本人会の葛藤—

野中 モニカ

日本人のブラジル移住開始から2018年で110周年を迎え、ブラジルにおける言語継承もこの110年で母語としての日本語から継承語・外国語へと移行した。戦前から戦後の急激な言語継承の変遷は、ブラジルでの継承日本語教育の空白期間を作り出したいわゆる「移民制限法」と呼ばれた1938年5月4日付大統領令第406号 (外国人入国に関する大統領令) が主な外的要因として挙げられよう。

本報告では、その「移民制限法」を受け、日本語教育の中止を決定したある日本人会の葛藤を、ブラジルサンパウロ州カフェゾーポリス植民地のカフェゾーポリス青年會が1940年8月15日に発行した会報誌「曙」を資料として考察する。

日本語による戦前のブラジル移民資料は、1938年の大統領令による農村における外国語出版物禁止が大きく影響しており、資料そのものが少ないのが現状である。更に、本報告の資料提供者は戦後生まれ、日本語の読み書きができない70代の日系2世であり、「家族の遺品として以外に意味があるのかわからない。」と提供資料について語ってくれた。外国語出版物が禁止されていた時期の文字資料である会報誌は存在そのものが貴重なものであると理解でき、本報告資料はブラジル移民研究において非常に重要であると考えられる。

移民開始から10年足らずの1915年にはブラジルで最初に日本語学校が設立され、母語としての日本語教育 (邦語教育) が最盛期を迎えたのが476校の日本語学校を数えた1938年であった。その後、同年12月には日本語学校全校が閉鎖され、戦後の日本語学校再開までの日本語教育空白期を経て1964年に日本語普及協会が発足する頃には、日本語はすでに「母語・

継承語」教育から「外国語」教育へとシフトしていた。前述した日本語教育空白期は、ブラジルのナショナリズム政策・同化政策によるいわゆる「移民制限法」が要因であると言えよう。

この「移民制限法」とは、1938年5月4日付大統領令第406号（外国人入国に関する大統領令）のことであり、農村の学校におけるポルトガル語以外での科目教授禁止、14歳未満への外国語教授禁止、ポルトガル語記載以外の小学校教科書使用禁止、農村における外国語出版物禁止が規定された。

本報告資料の会報誌「曙」第十巻第四号八月号は総36頁あり、カフェゾーポリス植民地における日本人会や青年会の会報、会員の提言や文学作品、児童の日本語作文などが含まれた構成になっており、そこに日本語教育の中止を伝える記述が残されている。

「七月二十日：日本語巡回教授中止に決定。領事館、文教会方面の意向並びに各地邦人団体に於ける実情取り調べ、合同協議の結果巡回教授中止に決す。」（「曙」：15）

「出先官憲としても、断然邦語教育を中止すべき旨内達がありました。」（「曙」：2）

カフェゾーポリス植民地における日本語教育中止の決定は、1938年の大統領令施行2年後、日本政府の意向である領事館内達を受けてのことである。それまでは、植民地内では日本語教室を定めない巡回日本語教授を続け、日本語継承を重要視してきたことが見られる。

「法令に背いて内密にやった行為の正当でないことを百も承知して居ながら已むに已まれぬ内面的要求に迫られて児童の指導啓発は是非共邦語教育を基本にして日本精神も養成したいという信條からであります。」（「曙」：2）

カフェゾーポリス植民地で重要視されていた日本語保持が、日本との単なる言語的なつながりだけでなく精神的なつながりをも意味

していることが示されている。そのため、日本政府から通達があった日本語教育中止は、日本側からの強制的で精神的な植民地とのつながりの切断として植民地側に映ったのではないだろうか。

「邦語教育に対し文字通り最後まで悪戦苦闘してきましたが、茲に涙を飲んでいさぎよく巡回教授を中止することに諦めをつけたのであります。」（「曙」：3）

これまで悪戦苦闘して続けてきた巡回日本語教授について、カフェゾーポリス日本人会は、遺憾でありながらも葛藤の末涙を飲んで中止を決定している。この決定により、他の多くの日本人集住地域同様カフェゾーポリス植民地においても、日本語からポルトガル語への強制的な言語移行が進んだと言えよう。

日本語の「学び」を奪われ、ポルトガル語学習への移行を意義無くされた当事者に対し、その「学び」を奪ったのは直接的には外国語禁止関連法を打ち出したブラジル政府であるが、間接的にはブラジル政府との外交摩擦を避けようとした日本政府であり、更にはその意思を受け最終的な中止を決定した日本人会であるとも言えよう。つまり、カフェゾーポリス日本人会からは植民地の一員として日本語教育を続けたいが中止せざるを得なかった当事者・被害者意識、および日本政府の意思の仲介者として日本語教育を中止させた間接的加害者意識という複合的葛藤が読み取れるのではないだろうか。

（天理大学国際学部准教授）

アメリカ短期留学における日本人大学生の 第2言語コミュニケーションと異文化適応 —長期留学と比較して—

小林 千穂

今日のグローバル社会において、異文化対応力をもった人材の育成がますます求められており、留学はこうした能力の育成に貢献すると考えられる。八島(2004a, 2004b)は、個々の文化やコンテキストに特有の文化文法(対人関係処理の原理、意味の体系)として蓄積された知識の中に包摂される、第2言語コミュニケーション・コンピテンスを「異文化間コミュニケーション・コンピテンス」と呼び、異文化の相手とのコミュニケーションを目的とする外国語教育は、このような能力を視野に入れて行われるべきだと述べる。また、潜在的な能力である、異文化間コミュニケーション・コンピテンスが異文化接触場面で表出される時には、認知レベル、情動レベルで様々な心理変数が影響する。八島は、こうしたパフォーマンスの側面も視野に入れるべきであると論じる。

著者の先行研究(2017a, 2017b)では、留学が期間に関わらず、調査協力者の英語学習に対する態度やモチベーションの様々な側面に肯定的な変容をもたらすことが明らかになった。その背景には、留学中の異文化接触体験があると考えられる。しかし、異文化接触体験の具体的な内容については、詳しく考察することができなかった。また、留学の成果についても、英語学習に対する態度やモチベーションの観点から考察しただけだった。そこで、本研究では、短期留学の参加者の異文化接触体験の詳細、つまり、彼らが、どのようにコミュニケーション活動を行い、対人関係を築きながら、異文化社会に適応していったのか、その結果どのような効果をもたらされたのかを、「異文化間コミュニケーション・コンピテンス」と「異文化間コミュニケーション・パフォーマンス」の観点から検証

した。また、留学期間の影響を明らかにするために、彼らの体験を長期留学の場合と比較した。

本研究は2段階からなる研究の第2段階である。調査1では、91名の調査協力者に対し、出発の数週間前と帰国の数週間後に、英語学習に対する態度やモチベーションについて問う質問紙を配布し、記入させた。調査1でモチベーションや態度の変容の全体的な傾向を明らかにした後、調査2では、変容の理由やプロセスを明らかにするため、調査1の協力者の中から、留学期間の異なる2つのグループを幅広く代表するように選出した15名に対し、帰国の約半年後に、半構造化インタビューを実施した。この15名の内、10名は海外語学実習という必修科目として、3週間の短期プログラムに参加した。残りの5名は、4か月以上の長期の交換留学または認定留学に参加した。このインタビューは、1人につき40～50分で、英語学習に対するモチベーションや態度、英語力、留学中の体験などについて尋ねた。本研究では、調査2で得られたデータの再分析を通じて、調査協力者の留学中の第2言語コミュニケーションと異文化適応について検証した。

短期留学の参加者の、留学中の英語を使用したコミュニケーション行動は、頻度や形態において限定的であった。ホームステイ先では英語を使ったが、学校では日本語を使うことが多かった。また、ホームステイ先でのコミュニケーション活動においても、齟齬が生じることがよくあったが、様々なストラテジーを使って、何とか意思の疎通を図った。このようなコミュニケーション活動によって、英語力そのものを大きく上昇させなかったが、英語でのコミュニケーションに少し自信をつけた。調査協力者は、他の参加者と一緒に、和気藹々とした雰囲気の中で実践的な授業を受講することができた。また、ホストファミリーと良好な関係を築き、充実した、満足度の高い生活を送ることができた。

つまり、現地での生活に適応することができたと解釈できる。このようなポジティブな経験を通して、異文化に興味を覚え、さらなる異文化接触への意欲を高めた。

長期留学の参加者のコミュニケーション行動は、質量ともに、短期留学の参加者のコミュニケーション行動を上回り、それを通じた言語習得の程度も大きかった。また、より深いレベルの交流を通じて、現地の人々や文化に対する多面的な理解に達した。しかし、短期留学の参加者と長期留学の参加者は、言語や文化の習得に関わる様々な側面において、程度の差はあっても、共通のプロセスを辿った。この点で、留学は、両方のグループの「異文化間コミュニケーション・コンピテンス」や「異文化間コミュニケーション・パフォーマンス」の養成に貢献したと言える。こうした短期語学研修は、参加者の多くが海外経験の少ないことを考えれば、ストレスのより少ない環境で同様の能力を養成できる、留学の妥当な形態の一つだと考えられる。

[参考文献]

小林千穂 (2017a) 「短期留学の外国語学習モチベーションへの効果」『天理大学学報：語学・文学・人文・社会・自然編』第 244 輯, 1-19.

小林千穂 (2017b) 「インタビュー調査から見る短期留学の外国語学習モチベーションへの影響：長期留学と比較して」『天理大学学報：語学・文学・人文・社会・自然編』第 246 輯, 1-30.

八島智子 (2004a) 『外国語コミュニケーションの情意と動機：研究と教育の視点』大阪：関西大学出版部.

八島智子 (2004b) 『第 2 言語コミュニケーションと異文化適応：国際的対人関係の構築をめざして』東京：多賀出版.

(天理大学国際学部准教授)

メキシコ日系自動車産業をめぐる 日本人通訳者の動き ーメキシコ・バヒオ地区を中心にー

野口 茂

近年、北米自由貿易協定 (NAFTA) 圏の自動車供給拠点として重要性のますますメキシコにおいて、日系自動車産業が急速に拡大している。2001 年には 271 社にすぎなかった日系企業数は 2016 年に 1,000 社を超え、2017 年の時点で 1,182 社にまで達した。とくに 2011 年から 2017 年までの 6 年間に進出した企業は 718 社にのぼり、その多くが自動車関連企業と見られている。この急激な変化に注目が集まり、自動車市場の動向や課題、そして 2017 年以降は米国トランプ政権による NAFTA 再交渉の行方などに関する情報分析や研究の蓄積が進むことになった。

だが他方で、こうした進出企業の増加を背景に、現地日系企業での就労を目的に海を渡る若者も増加の一途を辿っている。とくに大手自動車メーカーに続き数多く進出した各種サプライヤーにとって、日本語とスペイン語を話せる通訳者や営業職の人材確保が急務となった。そのため、その需要に応えるかたちで、大学新卒者や転職希望者が直接メキシコの日系企業に「現地採用」され就労するケースも目立ってきているのである。しかし彼／彼女らの存在や動向についてはこれまで調査研究の対象とされることなく、いまだ議論の俎上にすら上がっていない。

本報告では、メキシコの自動車関連企業で就労するために移動した日本人の中でも、とくに通訳として働く現地採用者に焦点を当て、その移動の背景にあるマクロな構造的要因やメカニズムについて考察することにした。

メキシコにおける自動車産業の発展は 1920 年代、米国自動車メーカーによるノックダウン生産の開始が嚆矢とされる。その後、1960 年代

以降メキシコ政府は自動車産業を重要な戦略産業として位置づけ、海外企業へのさまざまな規制を次々と打ち出して、国内の自動車部品工業の育成に努めた。しかし1980年初頭、メキシコは対外債務危機に直面する。IMFや世銀主導の新自由主義経済改革が進められ、自動車産業についても保護主義的な輸入代替政策から自由化・規制緩和へと大きな転換を迫れることになった。そして1994年に発効したNAFTAにより、自由化の流れが一層加速することになる。1960年代から続いた輸入代替政策は終焉を迎え、メキシコはNAFTA体制下で新たに自動車生産・輸出拠点として発展を続けることになった。

メキシコの自動車産業が発展した要因の第一は、地理的優位性である。世界最大の自動車大国であり、かつ自動車産業の集積をもつ米国に隣接していることから、巨大な市場と低コストでアクセスが可能となっている。第二の要因は、豊富な労働力と安価な労働コストである。そして第三の要因としては、メキシコが世界の国々と締結する貿易協定の存在である。メキシコと世界各地との間でFTAネットワークが拡充したことにより、日本の自動車企業にとってメキシコは、米国やEUそして中南米の各市場へアクセスする上で重要な輸出生産拠点として位置づけられるようになった。

そのため欧米メーカーと同様、日本の自動車メーカーもメキシコ政府による自動車産業の政策や国際情勢の変化に対応するかたちで、メキシコへの進出と生産の拡大をはかった。1960年代に日系自動車メーカーとして初めて進出を果たした日産自動車を皮切りに、1990年代から2000年代初頭にかけてはホンダがグアダハラ近郊で（1995年）、トヨタが米国国境に近いティファナで（2002年）それぞれ生産拠点を設けた。

2011年以降、さらにその動きが活発化する。2011年6月にマツダがグアナファト州サラマ

ンカに新プラントの建設を発表すると、その2ヶ月後にはホンダが同州セラヤに第2工場の建設を発表した。翌年1月には、日産によるアグアスカリエンテス州での第3工場の増設と生産規模拡大の発表と続いた。日系企業の投資拡大にともない、マツダやホンダの系列部品メーカーの他に、鉄鋼や物流、機械など関連企業の新規進出も急増することになった。

しかしはじめて海外進出した中小の部品メーカーは勿論のこと、たとえ海外に生産拠点を設けていた企業でさえ、メキシコではアジア圏とは異なるさまざまな問題に直面した。とくに言語面では、現地での日本語学習者数は限られ、またメキシコ人の英語能力の相対的低さから、現地スタッフとは日本語はもとより英語によるコミュニケーションが成り立ちにくい環境に置かれた。

また文化や価値観の違いから生じるコミュニケーション・ギャップにも苦慮した。当然のことながら、自社で英語やスペイン語に長けた駐在員やエンジニアを派遣できる企業は限られていた。こうした事情により、メキシコの日系企業から日本人通訳者に対する需要が生まれることになった。

では、その需要に応じて海を渡った通訳者達は、どのような経緯で海外移住を決意したのだろうか。海外での就労を選択した通訳者の内的要因や、彼／彼女らを海外へと押し出した外的要因を明らかにするために、今後も現地での聞き取り調査を重ねて分析を続けていきたい。

（天理大学国際学部准教授）

お知らせ

◇天理大学アメリカス学会は、11月24日(土) 12:30から、天理大学研究棟3階第1会議室で総会を開催します。引き続き、13:00から、第23回年次大会を開催します。大会プログラムは次のとおりです。

〈総会〉 12:30～13:00

〈研究発表1〉 13:00～14:00

山田 政信氏 (天理大学教授)

〈研究発表2〉 14:30～15:30

山倉 明弘氏 (天理大学教授)

〈記念講演〉 15:45～17:15

川島 正樹氏 (南山大学教授)

演題：MLK50の年にちなんで—キング牧師
の願いはどこまで達成されたか？—

〈懇親会〉 18:00～20:00

◇記念講演をしてくださる川島正樹先生は、南山大学外国語学部教授で、同大学アメリカ研究センターの前センター長です。

数多くの日本語の著書に加えて、2017年にはPalgrave-Macmillan社から、*American History, Race and the Struggle for Equality: An Unfinished Journey*を刊行されました。お若いころからアメリカ各地をご自分の足で歩かれて、市民権運動の現場を自分の目でご覧になり研究された方です。

本年が、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師の暗殺後50年にあたることから、キング牧師の夢がどこまで達成されたかを論じてくださいます。また、普通の研究者が文献でしか知らないアフリカ系アメリカ人の運動

家を直接知っている川島先生ならではのお話が聞けることと思います。どうぞ、奮って聴講なさってください。

編集後記

◇第79号の巻頭言は、関西外国語大学外国語学部教授林美智代先生にご執筆いただきました。「新大陸」征服者の地を訪問した際の印象記がつづられています。「勝者は過去を強化する」、「高貴な血と富は物語を創作する」という林先生の歴史観を、そのいきさつヒストリーの解説と共に楽しみください。

今年度は、7月の研究会を学会員の研究発表中心の企画に改め、また、学会誌『アメリカス研究』を紙の出版から電子出版に変えるという改革を断行しました。今後も、学会活動の基本を堅持しながら、大学を取り巻く環境の変化に対応していきたいと思います。

◇当学会の年会費は一般会員は、5,000円です(入会金はありません)。なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年1口3万円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお申し出ください。

天理大学アメリカス学会ニュースレター

(No. 79 : 2018年11月1日発行)

発行者：初谷譲次

〒632-8510 天理市杣之内町1050

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

<http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/>